

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告4

－福光地域3－

2008年度

2009年3月

南砺市教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告4

－福光地域3－

2008年度

2009年3月

南砺市教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

## 序

南砺市には、国指定史跡である高瀬遺跡や世界遺産にも登録されている相倉・菅沼の合掌造り集落など、貴重な文化財が数多く存在しています。また、遙か太古からの先人の営みも残されており、立野ヶ原台地における旧石器時代の遺跡群をはじめ、市内の各所には縄文時代から中世までの遺跡が多数確認されています。

このような文化財は、現代に生きる我々が後世に引き継ぐ財産です。地域で産まれ、育まれてきた文化財は、保護・活用することで地域の発展に貢献すると考えております。市内に残された遺跡は、市の歴史を語るうえで他に変えることのできない貴重な資料であり、大切な文化遺産です。

市教育委員会では遺跡の把握、保存に努めるために詳細分布調査を行っています。市内の遺跡地図を充実させることは、今後の遺跡の保存と整備、開発行為との調整において欠かせません。

この報告書が今後の学術研究や、郷土の歴史を知るための参考となり、文化財保護に対する理解の一助になりましたら幸いです。

最後に、調査の実施にあたり、多大なご協力とご理解をいただきました地元の方々、関係者の方々に深く感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

南砺市教育委員会  
教育長 浅田 茂

## 例　　言

1 本書は、南砺市教育委員会が国庫補助を受けて実施している市内遺跡詳細分布調査（2008年度）の調査報告である。

2 調査は富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、南砺市教育委員会が主体となり実施した。

3 今年度の調査は、南砺市福光地域石黒地区（和泉・八幡・松木・川西・法林寺・中ノ江）、吉江地区（吉江中・遊部）、福光地区（西町他）、広瀬地区（坂本）、南蟹谷地区（人母・高畠・南蟹谷・砂子谷・土山・能美・藏原・湯谷・小又）を対象とした。吉江地区、福光地区、広瀬地区については、調査実施の便宜上、路旁は地区の一部について実施した。調査期間は次のとおりである。

平成20年4月8日(火)～4月13日(日)　— 吉江地区、石黒地区、福光地区、広瀬地区

平成20年10月4日(土)　　　　　　　— 南蟹谷地区

4 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長北島清、文化財係主任佐藤型子が調査事務を担当し、文化課長吉田鉢代が総括した。現地踏査、資料の整理、本書の執筆と編集は、以下の調査担当者、調査補助員が分担して行い、執筆の分担は文末に記した。

調査担当者　富山大学人文学部考古学研究室　教授　　黒崎　直

　　　　　同　　准教授　　高橋浩二

南砺市教育委員会文化課文化財係　主任　　佐藤型子

調査補助員　高橋彰剛・田上和彦（富山大学人文学部考古学研究室大学院生）

　　坂田裕之・佐藤雄太・高畠郁美・細丸善弘・増永佑介・松木綾子・村上直・横幕真  
(富山大学人文学部考古学研究室四回生)

今津和也・上原利予・千葉真吾（富山大学人文学部考古学研究室三回生）

　　鶴野千恵美・生方香織・及川実沙子・河合陽介・北村史織・繩織文佳・小浦方志織  
(東海林心・百瀬香菜子（富山大学人文学部考古学研究室二回生）

木下陽子・西川和美（南砺市臨時雇用職員）

調査参加者　山森伸正・下崎美麻・山本悦司・景山奈央子・片山亜紀（南砺市教育委員会文化課職員）

5 現地調査にあたって、福光地域各地区の方々に多大なご協力、ご理解を得た。記して深く感謝したい。

6 採集遺物および記録図面は、南砺市教育委員会が保管している。

7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1)方位は真北である。

(2)挿図の遺物実測図の縮尺は1/3に統一した。

(3)写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。

## 本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
I 位置と環境	1
II 調査の経過	2
第1表 調査区周辺における 周知の埋蔵文化財包蔵地	3
III 調査の概要	7
1 遺跡と採集遺物	7
2 遺物の散布状況	12
IV まとめ	14
参考文献	15
第2表 調査結果一覧表	16
図 版	
写真図版	

## 図版目次

第1図 南砺市位置図	
第2図 調査地区割図（1／200,000）	
第3図 調査地区概要図1（1／30,000）	
第4図 調査地区概要図2（1／30,000）	
第5図 調査結果概要図1（1／12,500）	
第6図 調査結果概要図2（1／20,000）	
第7図 古代の遺物散布状況（1／20,000）	
第8図 中世の遺物散布状況（1／20,000）	
第9図 近世・近代の遺物散布状況（1／20,000）	
第10図 遺物実測図（1）	
第11図 遺物実測図（2）	
第12図 遺物実測図（3）	

## 写真図版目次

図版1 遺跡全景（1）	
図版2 遺跡全景（2）	
図版3 遺跡全景（3）	
図版4 遺物全景（4）	
図版5 遺物写真（1）	
図版6 遺物写真（2）	

# I 位置と環境

平成16年11月1日、砺波地方所在の八町村であった城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、<sup>じょう</sup>福光町が合併し南砺市が誕生した。南砺市は富山県の南西部端に位置し、北は砺波市、小矢部市に、東は富山市に、西は石川県金沢市、南は岐阜県飛騨市や白川村に隣接している。山間部は、白山国立公園に指定され、すぐれた自然景観を残しており、庄川や小矢部川の流れる平野部は水田地帯として、また、「散居村」として知られている。面積は668.86平方kmで東西約26km、南北約39kmに広がっている。

旧石器時代の遺跡は、福光・城端両地域の境に位置する立野ヶ原を中心に広がっており、点在する144か所の遺跡は立野ヶ原遺跡群と呼ばれている。めのうや鉄石英が豊富で、それらを利用した石器製作場所がいくつか確認されており、富山県内で最も古い遺跡群の一つとして知られている。

縄文時代に入ると、生活の場は平野部にも広がる。草創期から前期にかけて確認している遺跡数は少ないものの、中期には西原A遺跡や成徳遺跡、後・晩期には後期の指標遺跡である井口遺跡をはじめ安居五百歩遺跡、五瀬遺跡がある。

弥生・古墳時代の遺跡は、確認されている数が少ないが、近年のは場整備事業等により神成遺跡では、弥生終末期から古墳時代にかけての竪穴住居や周溝構造を確認しており、また梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居を確認している。

古代の遺跡には、7世紀、9世紀の竪穴住居跡を約10棟確認した在房遺跡や、9世紀前半の梅原落戸遺跡がある。その他、中世の指標となる大集落として知られる梅原胡摩堂遺跡の東側で、8世紀から10世紀にかけての竪穴住居等の遺構を確認している。またこれら古代の集落に日常食器を供給していたであろう窯に安居・岩木窯跡群がある。

中世には、平野部に大規模な集落が広がる。梅原胡摩堂遺跡をはじめ久戸遺跡から田尻遺跡に至る中世集落跡は南北2km、東西1kmにわたり、掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸、区画溝などの遺構や、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸などの遺物が多く確認されている。

今年度の対象地域は、吉江地区の一部（吉江中・遊部）、石黒地区（和泉・松木・八幡・中ノ江・川西・法林寺）、福光地区の一部（西町）、広瀬地区の一部（坂本）、南蟹谷地区（人母・高塙・土山・砂子谷・湯谷・藏原・能美・小又）である。吉江、石黒地区は、中世に村が開けたとされ、当時の土豪、石黒氏一族の居館が存在したとの伝承がある。周知の埋蔵文化財包蔵地にも、中世の館跡や寺院跡が目立つ。遊部地内には遊部城跡、常楽寺跡が存在する。松木地内には長勝寺跡、福光地区西町には殿館遺跡がある。また松木地内には、小字で高土居という地名があり、土豪の館跡の存在を彷彿とさせる。川西地内には、西勝寺、定龍寺の地名があり、寺跡が存在したことを裏付けしている。西勝寺地内所在の高橋城跡は、石黒太郎光弘の居館であったと伝えられている。南蟹谷地区は、旧石器、縄文時代の遺跡が主である。市指定史跡である人母シモヤマ遺跡では、ナイフ形石器、彫刀形石器、搔器などの旧石器時代の石器や、縄文草創期の押型文土器が出土している。縄文前期から中期初頭にかけての複合遺跡である人母茂谷遺跡からは、羽状縄文が施された土器片や、石鎌、剥片石器等が出土している。また、中世にはこの地区が周辺への真宗布教活動の拠点のひとつとなった。本願寺第八世蓮如が土山の地に開いた土山御坊は、その後高塙地内に居を移し高木場御坊と称し、小矢部市安養寺に移転した後、高岡市伏木に移転した。これが現高岡市伏木所在の勝興寺である。

（佐藤聖子）



第1図 南砺市位置図

## II 調査の経過

平成16年11月の町村合併までに各々の旧町村で確認していた埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」）の数は、590ヶ所あまりである。これらの包蔵地の多くは、古い伝承に基づくもの、開発行為にかかる事前調査によつて発見されたものである。町村合併時において、詳細な分布調査が行われていたのは、旧福野町全域、旧城端町域の平野部、旧福光町・旧井口村域において県営ほ場整備事業等の大規模な開発行為が行われた地域のみであった。市内には、未だ包蔵地の詳細が全く確認されていない未調査地区が多く、また包蔵地の保護と開発行為との円滑な調整を計つていくためにも、詳細な分布調査を実施することとなった。

分布調査の実施については、旧城端町で平成13年度より7ヶ年にわたって町全域を調査する予定にしていたが、町村合併にあたり計画変更を行い、平成18、19年度に調査予定であった旧城端町域の山間部を先送りし、未だ未調査地区が多い南砺市の平野部について先行し調査を行うこととした。

南砺市平野部における未調査地区は、福光地域（調査実施済みである北山田地区、高宮・小林・殿の一部、岩木、祖谷、竹内を除く）、井口地域の一部、井波地域である。このうち、福光地域を4分割、井波地域、井口地域を合わせて2分割し、未調査地区を7分割し7ヶ年で南砺市平野部の調査を実施することとした（第2図参照）。調査の成果は年度毎にまとめ公表する予定である。

平成20年度については、当初予定では、福光地域調査対象地区内の南側、西太美地区を踏査する予定であったが、開発行為等比較的多い吉江、石黒地区周辺及び南蟹谷地区を先行した。

調査は、南砺市が国庫補助を受け、富山大学考古学研究室の指導・協力を得て進めることとした。現地踏査は、春期については吉江、石黒、福光、広瀬地区を対象とし、平成20年4月8日から4月13日の間、実働3日間で行い、約28名が参加した。秋期には南蟹谷地区を対象とし、平成20年10月4日に踏査を行い、約20名が参加した。南蟹谷地区については、田面が観察可能な各集落周辺や、周知の包蔵地近辺について踏査を行った。踏査の際は、1/2,500もしくは1/5,000の地形図を持参し、田畠一枚一枚をくまなく踏査し、土器、石器等の遺物を採集して、採集地点を図面に記録した。採集した遺物は、洗浄後採集地点を注記し、実測作業をおこなった。その後、遺物の散布状況、地形、伝承等も加味しつつ、包蔵地の範囲を決定した。

今年度の調査対象地において、調査実施までに確認している周知の包蔵地及び調査履歴については、第1表のとおりである。

（佐藤聖子）

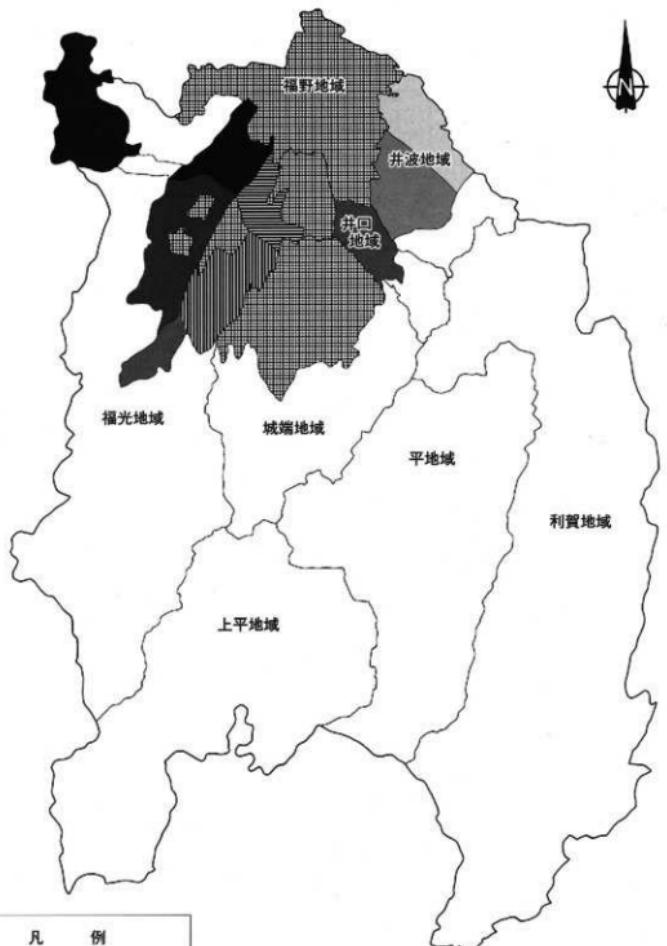
第1表 調査区周辺における周知の埋蔵文化財包蔵地

吉江・石黒地区

遺跡名	ふりがな	所在地	主な時代	種 別	発掘調査履歴	調査原因	備 考
長勝寺跡	ちゅうしゆうじあと	松木	不明	小明社寺	無		
川合田船跡	かわいだいかたあと	川合田字田中	中世	中世城館	無		
光應寺遺跡	こうとうけいせき	法林寺	近世	近世社寺	無		
妙法寺跡	みほじあと	川合田	中世	中世社寺	無		
道部城跡	あそぶじょくあと	遊部	中世	中世城館	無		
常楽寺跡	じょうらくじあと	遊部	中世	中世社寺	無		
般若遺跡	とのたちいせき	西町	中世	中世城館	無		
高橋城跡	たかばしゆじあと	西勝寺	中世	中世城館	無		
般若寺跡	さいしょじあと	内勝寺字北辻	中世	中世社寺 中世城館	無		南砺市指定史跡
西勝寺遺跡	さいしょじいせき	内勝寺	繩文 中世	繩文散布地 中世城館	無		
古江中遺跡	よしえなかいせき	遊部	古代 中世	散布地	無		平成18年度分査調査 により確認
仏造寺跡	ぶつぞうじあと	田中	繩文 古代 中世	繩文散布地 古代散布地 中世散布地 中世社寺	平成9年度 試掘調査	共同住宅建設	平成9年度試掘調査に よる遺構、遺物無し 平成18年度分査調査 により範囲を東西側に 拡大

## 南蟹谷地区

遺跡名	ふりがな	所在地	主な時代	種 別	発掘調査履歴	調査原因	備 考
人母シモヤマ遺跡	ひとはしもやまいせき	人母字下山	旧石器 縄文早 縄文中 縄文後 绳文晚	旧石器散布地 縄文早散布地 縄文中散布地 縄文後散布地 绳文晚散布地	無		南砺市指定史跡
人母シモヤマ西遺跡	ひとはしもやまにしいせき	人母字下山	旧石器	旧石器散布地	無		
人母Ⅰ遺跡	ひとはいちいせき	人母字下山	縄文	縄文散布地	無		
人母Ⅱ遺跡	ひとはいにいせき	人母字下山	旧石器	旧石器散布地	無		
人母Ⅲ遺跡	ひとはさんいせき	人母字下山	縄文	縄文散布地	無		
人母茂谷遺跡	ひとぼもたにいせき	人母字茂谷	縄文 古代	縄文散布地 古代散布地	無		
人母茂谷西遺跡	ひとぼもたににしいせき	人母字茂谷	不明	不明散布地	無		
人母ウルシバツ遺跡	ひとはるしぶらいせき	人母	縄文	縄文散布地	無		
高木場御附跡	たかぎばごはうあと	高庭	中世	中世社寺	平成14年度 試掘調査	国道304号 線改良	試掘調査による遺構、 遺物無し
高庭遺跡	たかひびいせき	砂子谷	縄文	縄文散布地	無		
藏原A遺跡	くらはねえいせき	藏原	縄文	縄文散布地	無		
藏原B遺跡	くらはらびーいせき	藏原	縄文	縄文散布地	無		
熊野社遺跡	くまのしゃいせき	上山	近世	近見不明	無		
十山御坊・御跡城跡	じゅざむこう・ごみねじょうせき	土山	中世	中世社寺 中世城館	無		南砺市指定史跡
領家	りょうづか	小又	中世	祭祀	無		
笠塚遺跡	さきづかいせき	川合田	中世	祭祀	無		
大休場遺跡	おおやすんばいせき	坂本	近世	祭祀	無		
堂平遺跡	どうたいらいせき	坂本	不明	祭祀	無		
法林寺尾遺跡	ほうりんじおのせき	坂本	不明	祭祀	無		
爭出山遺跡	きどりやますみづか	坂本	不明	祭祀	無		



#### 凡 例

- 調査完了地域
- 平成18年度調査実施地域
- 平成19年度調査実施地域
- 平成20年度調査実施地域
- 平成21年度調査予定地域
- 平成22年度調査予定地域
- 平成23年度調査予定地域
- 平成24年度調査予定地域
- 平成25年度調査予定地域

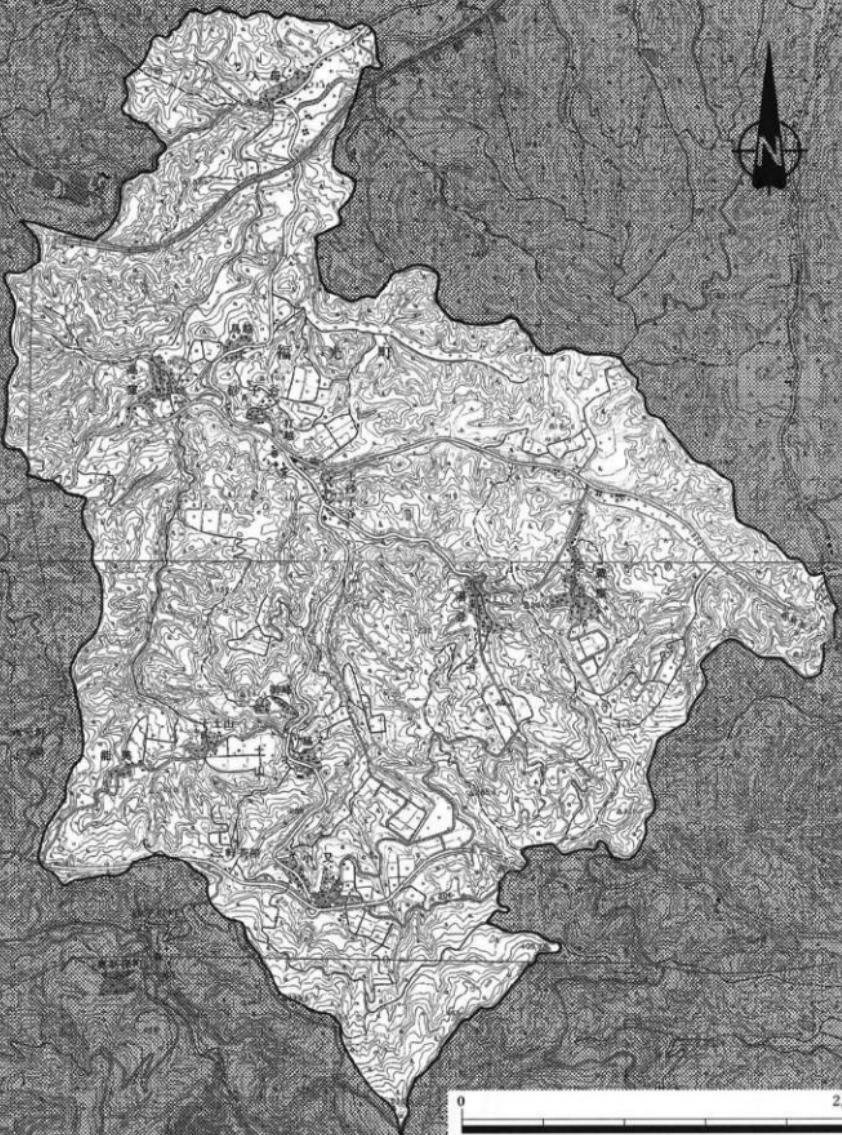
0

10km

第2図 調査地区割図 (S=1/200,000)



第3図 調査地区概要図1 (S=1/30,000)



第4図 調査地区概要図2 (S-1/30,000)

### III 調査の概要

今回の調査範囲は、吉江・石黒地区と南蟹谷地区の2つに分かれる。前者からは次に示すように多数の遺物が採集されたが、後者からは遺物が採集されなかった。したがって、以下では吉江・石黒地区における調査成果を中心に記す。

#### 1 遺跡と採集遺物

##### (1) 松木遺跡

採集した遺物は、須恵器が30片、土師器が21片、珠洲が3片、越中瀬戸が1片、中世陶器が1片、瓦質土器が1片で、そのうち23点を図示した。

1は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約12cmを測る。端部にかえりがなく、8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径3mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

2は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約13cmを測る。端部は下方へ短く屈曲している。8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

3は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約13cmを測る。端部は下方へ短く屈曲している。8世紀頃のものと思われる。内面はロクロナデ調整を施す。外面の調整は欠けているため不明である。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

4は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約18cmを測る。端部にかえりがなく、8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

5は須恵器杯の口縁部である。口径は約8.5cmを測る。端部は上方へ直線的にのび、丸くおさめる。8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が青灰色、内面が灰白色を呈する。焼成は良好である。

6は須恵器杯の口縁部である。口径は約12cmを測る。端部はやや内湾しながら上方へのび、丸くおさめる。8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密である。色調は外面が青灰色、内面が灰白色を呈する。焼成は良好である。

7は須恵器杯の口縁部である。口径は約12cmを測る。端部は上方へ直線的にのび、丸くおさめる。8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が青灰色、内面が灰白色を呈する。焼成は良好である。

8は須恵器杯の底部である。底径は約7cmを測る。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

9は須恵器杯の底部である。底径は約9cmを測る。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

10は須恵器杯の底部である。底径は約7cmを測る。底部には粘土ひもの痕跡が明瞭に残る。8世紀頃のものと思われる。内面にはナデ調整を施す。胎土は密であり、直径2mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

11は須恵器双耳壺の胴部である。体部には幅約1cmの突帯がめぐる。10世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良

好である。

12は須恵器の甕か壺の胴部である。外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径2mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

13は須恵器甕の胴部である。外面には平行タタキ目を残す。胎土は密であり、直径6mm以下の砂礫を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

14は須恵器甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には当て具痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

15は須恵器の甕か壺の胴部である。外面にはタタキ目、内面には同心円の当て具痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は不良のため生焼けである。

16は珠洲甕の胴部である。外面にはタタキ目、内面には当て具痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

17は珠洲甕の胴部である。外面には3cm幅に10条のタタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

18は土師器皿の口縁部である。口径は約7cmを測る。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

19は土師器皿の口縁部である。口径は約9cmを測る。調整は内外面ともに風化のため不明である。胎土は密であり、直径3mm以下の砂粒を含む。色調は内外面が灰白色、口縁約1cm部分は灰色を呈する。焼成は良好である。

20は土師器皿の底部である。底径は約8cmを測る。調整は内外面ともに風化のため不明である。胎土は密である。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

21は越中瀬戸皿の底部である。底径は約7cmを測る。底部の割り高台は三角形状を呈する。17世紀前葉から17世紀中頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。底部にはロクロヘラケズリを施す。外面の一部に暗褐色の釉を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。

22は陶器椀の底部である。わずかに上げ底となる。底径は約9cmを測る。内外面にはロクロナデ調整を施す。内面には灰褐色の鉄釉を施す。胎土は密である。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

23は瓦質土器火鉢の口縁部である。口径は約13cmを測る。調整は内外面ともに風化のため不明である。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面が暗灰色、断面が浅黄色を呈する。焼成は良好である。

(生方香織・河合陽介・繩纏文佳)

## （2）和泉西領遺跡

採集した遺物は、須恵器5片である。そのうち3点を図示した。

24は須恵器の甕か壺の胴部である。外面には平行タタキ目を施す。内面にはナデ調整が認められる。胎土は密であり、直径5mmの砂礫を含む。色調は内外面ともに青灰色を呈する。焼成は良好である。

25は須恵器の甕か壺の胴部である。外面には格子状のタタキ目を施す。内面は風化が著しいが、一部にロクロナデ調整が認められる。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに青灰色を呈する。焼成は良好である。

26は珠洲甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに淡い青灰色を呈する。焼成は良好である。

(東海林心)

### (3) 川西北辻遺跡

採集した遺物は、須恵器2片、珠洲2片である。その内3点を図示した。

27は須恵器の壺か壺の胴部である。外面にはカキ目を施す。カキ目は1cm幅に9条のものである。カキ目の下位には斜位の平行タタキが認められる。外面には自然釉が残る。内面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は、外面オーリーブ灰色、内面薄灰色を呈する。焼成は良好である。

28は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキを施す。内面は風化するが、ナデ調整が確認できる。胎土は粗く、2mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰色、断面薄灰色、内面薄青灰色を呈する。焼成は良好である。

29は珠洲片口鉢かすり鉢の口縁部である。口径は約24cmと小さい。端部には外傾する幅1cmの面をもつ。吉岡氏による編年の珠洲Ⅲ期（13世紀後半）に属すると考えられる（吉岡1994、以下珠洲編年はこれに準拠する）。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面青灰色、内面薄灰色を呈する。焼成は良好である。

（百瀬香菜子）

### (4) 常楽寺跡

採集した遺物は、須恵器1片、土師器（古代1、不明2）、常滑1片、瀬戸1片、珠洲1片、中世陶器1片、近世陶器7片、近世磁器2片である。そのうち、4点を図示した。

30は珠洲壺の口縁部である。口径は約25cmを測る。端部は鋭く外屈し、垂下する。時期は珠洲Ⅱ期（13世紀前半）に属する。内外面ともに、ロクロナデ調整を施す。胎土は密で直径1mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰白色、内面灰色を呈する。焼成は良好である。

31は瀬戸壺の口縁部である。口径は約17cmを測る。内外面には透明の釉を施す。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

32は常滑で、器種は不明である。胎土は密で、直径1mm以下の砂粒を含む。外面に暗褐色の鉄釉が施される。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

33は施釉陶器碗の口縁部である。口径は約15cmを測る。内外面には透明な釉が施される。外面に暗褐色の格子状の模様が描かれている。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。（北村史織）

### (5) 川西細田遺跡

採集した遺物は、須恵器4片、珠洲1片である。すべてを図示した。

34は須恵器壺の胴部である。外面には格子状のタタキ目、内面には当て具痕を残す。胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。色調は内外面ともに薄青灰色、断面薄灰色を呈する。焼成は良好である。

35は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキを施す。内面には明確ではないが、当て具痕が認められる。外面の一部には自然釉が残る。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

36は須恵器壺の胴部である。外面にはナデ調整とロクロナデ調整が認められる。内面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で、2mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰色、内面青灰色を呈する。焼成は良好である。

37は須恵器の壺か壺の胴部である。外面には上部にロクロナデ調整、下半部にヘラケズリ調整が認められる。内面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面青灰色、内面灰色を呈する。焼成は良好である。

38は珠洲壺の胴部である。外面に平行タタキを施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は薄灰色を呈する。焼成は良好である。

（百瀬香菜子）

#### (6) 法林寺村中遺跡

採集した遺物は、須恵器2片、土師器2片、珠洲1片である。そのうち4点を図示した。

39は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキ目を施す。内面にはナデ調整が認められる。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに淡い青灰色を呈する。焼成は良好である。

40は須恵器壺の胴部である。外面には擬格子状のタタキ目、内面には同心円の当て具痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は外面濃い青灰色、内面灰色を呈する。焼成は良好である。

41は珠洲壺の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに淡い青灰色を呈する。焼成は良好である。

42は陶器すり鉢の底部である。内面には1cm幅で5条の御目を施す。外面は剥離または風化が著しい。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに褐色を呈する。焼成は良好である。

(東海林心)

#### (7) 坂本遺跡

採集した遺物は須恵器3片、珠洲1片、近世陶器1片である。そのうち、2点を図示した。

43は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキ目が残る。内面は風化するが、わずかに当て具痕が認められる。胎土は密で、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は内面は灰白色、外面は青灰色を呈する。焼成は良好である。

44は珠洲すり鉢の口縁部である。口径は約30cmを測る。端部内面が肥厚し、幅1.2cmの面をなす。時期は珠洲V期（15世紀前半）に属する。内外面にロクロナデ調整が施される。内面には1cm幅で4条の御目が施される。胎土は密で、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色である。焼成は良好である。 (北村史織)

#### (8) 法林寺高屋遺跡

採集した遺物は須恵器1片、珠洲1片、青磁1片である。すべてを図示した。

45は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約12cmを測る。端部は短く屈曲し、わずかにふくれる。時期は8世紀頃に属する。内外面にロクロナデ調整を施している。胎土は密である。色調は外面が灰白色、内面は青灰色を呈する。焼成は良好である。

46は珠洲壺の胴部である。外面には約3cm幅で9条の平行タタキ目が残る。内面には指頭痕が認められる。胎土は密で、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

47は青磁碗の口縁部である。口径は約15cmを測る。内外面厚さ約0.5mmにオリーブ黄色の釉を施す。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。 (北村史織)

#### (9) 吉江中遺跡

採集した遺物は、須恵器3片、越中瀬戸2片、近世磁器5片である。そのうち5点を図示した。

48は須恵器杯蓋の口縁部である。口径は約11.5cmである。端部はわずかに屈曲し丸くおさめている。8世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

49は須恵器壺の胴部である。外面には格子タタキと平行タタキを施す。内面に当て具痕がわずかに確認できる。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

50は須恵器壺の胴部である。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、3mm以下の砂粒が混じる。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

51は越中瀬戸皿の口縁部である。口径は約10cmを測る。内外面にはロクロナデ調整が施される。また、内外面には暗褐色の鉄軸が認められる。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

52は磁器椀の底部である。底径は約4.5cmを測る。内外面ともに水挽きロクロ成形がなされる。また、内外面ともに明オリーブ灰色の軸が認められる。外面には青灰色の模様が描かれる。胎土は密である。色調は断面灰色を呈する。焼成は良好である。

(小浦方志穂)

#### (10) 仏道寺跡

採集した遺物は、須恵器2片、土師器2片、越前1片、唐津1片、越中瀬戸3片、近世陶器2片、近世磁器1片である。その内2点を図示した。

53は越中瀬戸皿の底部である。底径は約5cmを測る。底部の割り高台は三角形状を呈する。17世紀前葉から中頃のものと思われる。外面には底部にヘラケズリ調整、体部にロクロナデ調整が施される。内面にはロクロナデ調整が施される。外面の一部には暗褐色の鉄軸が認められる。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は浅黄色を呈する。焼成は良好である。

54は近世の唐津椀の口縁部である。口径は約10cmを測る。外面には縞状、内面には白色軸で模様が描かれる。全面に透明釉がかかる。胎土は密である。色調は断面灰褐色を呈する。焼成は良好である。(鶴野千恵美)

(11) 最勝寺跡、(12) 長勝寺跡、(13) 川合田館跡、(14) 光徳寺遺跡、(15) 妙法寺跡、(16) 遊部城跡、  
(17) 殿舎遺跡

今回の調査において遺物は採集されなかった。

(河合陽介)

#### その他の採集遺物

遺跡範囲外の採集品についても、将来的な遺跡発見の可能性を高めるため、すべての採集地点を記録している。そのうち主なものについても示す。

55は須恵器杯蓋の破片である。内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径2mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

56は須恵器壺の胴部である。風化が激しいが、外面にタキ目が確認できる。内面には同心円状の当て具痕を残す。胎土は密であり、直径2mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

57は越前の壺か壺の胴部である。内外面にロクロナデ調整が施される。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともに褐色を呈する。断面の色調は内面に近い方が褐色で、外側がにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

58は青磁椀の胴部である。内外面ともにオリーブ灰色の軸がかかる。軸の厚さは約1mmである。外面には部分的に錫連弁が残る。14世紀頃のものと推定される。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

59は珠洲壺の頭部から肩部である。肩部には斜位のタキ目が認められる。外面は頭部にロクロナデ調整、肩部に平行タキ目が施される。内面には当て具痕が施される。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面は淡青灰色、内面は青灰色を呈する。焼成は良好である。

60は珠洲壺の胴部である。内外面にはロクロナデ調整が施される。胎土はやや粗く、3mm以下の砂粒を含む。色調は外面は青灰色、内面は灰色を呈する。焼成は良好である。

61は珠洲すり鉢の体部である。外面はロクロナデ調整を施す。内面には3cm幅に9条の鉢目が施される。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

62は珠洲すり鉢の体部である。外面にはロクロナデ調整が施される。内面には1cm幅に6条の鉢目が施される。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

63は越中瀬戸すり鉢の体部である。内面には1cm幅に5条の鉢目が施されている。内外面にはぶい褐色の鉄釉を施す。胎土は密である。色調は断面にぶい黄色を呈する。焼成は良好である。

64は越中瀬戸皿の底部である。底径は約5cmを測る。高台の断面は丸みを帯びた三角形状である。内面の一部に暗褐色の釉が認められる。外面には体部にはロクロナデ調整、左部にヘラケズリ調整を施す。内面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、1mm程度の砂粒を含む。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

65は越中瀬戸皿鉢の底部である。底径は約10cmを測る。内外面に暗褐色の鉄釉を施す。釉は所々で剥離している。胎土は密であり、直径2mm以下の砂粒を含む。色調は断面暗灰黄色を呈する。焼成は良好である。

66は土師器骨壺蓋である。外面はロクロナデ調整を施す。つまみ部は直径1cmで上方へ4mm突出している。胎土は密で、2mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

67は土師器骨壺の胴部である。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。外面に墨書きが認められる。

68は近世陶器椀の口縁部である。口径は約9cmを測る。外面には緑灰色の模様が描かれる。内外面には明オリーブ色の釉が施される。胎土は緻密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

69は磁器染付字入壺の口縁部である。口径は約10cmを測る。外面には墨で文字が書かれる。内外面には透明な釉が施される。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

70は唐津鉢の口縁部である。口径は約15cmを測る。口縁部は短く折り返され、端部が丸みを帯びている。内外面には縞状に白色釉が施される。内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、直径1mm以下の砂粒を含む。色調は断面灰赤色を呈する。焼成は良好である。

71は砥石である。時期は不明である。残存部の最大長は約8cm、最大幅は約2.3cm、最大厚は約2cm、重さは約67gである。石材は砂岩質のものである。端面を除く全面に研磨痕が認められる。実測図は4面ともに示したが、特に1面と4面には使用によって溝状にへこんだ痕が見られる。また、1面と4面には製作段階のものとみられる細かな調整痕が認められる。色調は灰色を呈する。

72は砥石である。石材、時期はともに不明である。直径は推定約18cmを測る。残存部の最大厚は約2cm、重さは約108gである。断面は、中心から約6cmは長方形を呈し、そこから外に向かって約1cm突出する。突出部の上面と下面には、1cm幅にそれぞれ13本、約6本の筋状の研磨痕が残る。研磨痕は上面の全体にわたって認められる。中心には直径推定約4cmの穴が開いていたと考えられる。そこに棒状のものを通し、回転させて使用していたと推測できる。色調は上面にぶい赤褐色、下面は暗灰色を呈する。

(鵜野千恵美・及川実沙子・小浦方志穂)

## 2 遺物の散布状況

今回の調査で採集した遺物の総数は、213片である。これらの散布状況を時期別に大別、集計した。1辺250mの方眼を設け、方眼1つを1ブロックとして、ブロック単位で採集遺物点数を示すこととする。

各時期の総量は、古代77、中世29、近世48、近代44、時期不明15片である。

また、今回の調査区の明神川と小矢部川に挟まれた地域を中心部と考え、それより東西をそれぞれ東部、西部と分け散布状況を示すことにする。

### (1) 古代の遺物散布状況（第7図）

古代の遺物は須恵器56片、土師器21片を27ブロックから採集した。

土師器と須恵器はほぼ松木遺跡から集中して採集した。調査区中央部北側の和泉西領遺跡周辺でも採集した。東部は川合田館跡や法林寺高屋遺跡、坂本遺跡などの周辺で1片ずつ採集した程度である。西部は吉江中遺跡、仏道寺遺跡、常楽寺跡の遺跡範囲の近くで若干集中して採集した。古代は松木遺跡を中心として中央部に遺物集中があり、次に西部に集中する。今回の調査区では今まで古代の遺跡が発見されていなかったが、松木遺跡と和泉西領遺跡は今回の調査で発見された遺跡である。これらの発見により一昨年の調査区との関連を考えられるだろう。

### (2) 中世の遺物散布状況（第8図）

中世の遺物は土師器2片、珠洲16片、越前2片、常滑1片、瀬戸1片、瓦質土器1片、それ以外の陶器4片、青磁2片を21ブロックから採集した。

調査区全域から採集した。中世遺物の全体的な数量は少ないが調査区中央部の松木遺跡からの採集が一番多い。東部の常楽寺遺跡と仏道寺遺跡周辺からは常滑、瀬戸、越前が1片ずつ採集された。これらも一昨年の調査区との関連が考えられるかもしれない。西部では新規遺跡に1、2片含まれる程度の分布である。中世も古代に引き続く散布状況が考えられるだろう。中世の採集遺物の少なさは他地域よりも開発が進まなかった現象とも考えられるが現段階では言及できない。

### (3) 近世の遺物散布状況（第9図）

近世の遺物は土師器2片、越中瀬戸11片、唐津3片、それ以外の陶器20片、磁器12片を25ブロックから採集した。

近世も中世と同じように調査区全域に遺物が分布している。調査区中央部では松木遺跡よりもやや南側から数点採集した。西部は南側に集中があるが点数は少ない。東部の吉江中遺跡、仏道寺遺跡、常楽寺遺跡周辺で比較的多く採集した。近世では東部に遺物が集中する。近世は中世からの開発が進んだ結果、採集点数が多くなったのではないかと推測される。古代、中世からみると遺物集中が調査区中央部から東部に変わった。近世において一昨年の調査区との関連は間違いないが、東側の梅原遺跡群などと関連した様相が伺えそうである。

(田上和彦)

## IV まとめ

今回の分布調査は、南砺市の西部を占める旧福光町において、2006年度調査範囲の北西に接する吉江・石黒地区を対象に行った。この地区は、標高約60~100mを測る南砺台地および扇状地にあって、小矢部川と医王山麓に挟まれた地域に位置し、ほぼ中央には小矢部川支流の明神川が北流している。

本地区的周辺には、縄文時代の遺跡が比較的多く分布するのに対して、弥生・古墳時代の遺跡はほとんど認められない。古代には、砺波郡が設置され、また平野部（砺波平野）には東大寺領莊園が形成されていくが、旧福光町域において確認された古代の遺跡はまだ少ない。条理造構についても未検出であることからすれば、平野部に比べ遅れて開発が進行していったと考えられる。一方、中世には、大井川と山田川に挟まれた段丘上に、梅原胡摩堂をはじめとした遺跡が複数成立し、大規模な遺跡群を形成するようになる。この一帯は、後三条天皇の御願寺円宗寺の所領である石黒荘の内の山田郷にあたり、莊園支配の拠点であったと推定される。

さて、吉江・石黒地区内には從来12ヶ所の遺跡が周知されていたが、今回あらたに7ヶ所で遺跡を発見した（第2表）。また、12ヶ所の内3ヶ所については遺跡の範囲が拡張することになった。以下にその概略を示す。

新規発見の川西細田遺跡は、古代から中世にかけての遺跡で、須恵器4片、珠洲1片を採集している。川西北辻遺跡も同じく古代から中世の遺跡で、須恵器2片、珠洲2片を採集している。和泉西領遺跡は、古代の遺跡で、須恵器5片を採集している。松木遺跡は、古代から近世の遺跡で、須恵器30片、土師器21片、珠洲3片、瓦質土器1片、越中瀬戸1片、近世陶器1片を採集している。採集遺物の様相から、古代を中心とする時期の遺跡と考えられる。法林寺村中遺跡は、古代から中世の遺跡で、須恵器2片、土師器2片、珠洲1片を採集している。法林寺高屋遺跡も古代から中世の遺跡で、須恵器1片、珠洲2片、青磁1片を採集している。坂本遺跡は、古代から近世の遺跡で、須恵器3片、珠洲1片、近世陶器1片を採集している。

統いて、範囲の拡張した遺跡について述べる。中世の寺跡とされる常楽寺跡は、今回の調査で東へ約100m、北へ約130m拡張することとなった。そして、ここからは須恵器2片、土師器3片、常滑1片、瀬戸1片、中世の陶器1片、近世の陶器7片と磁器2片が採集され、古代から近世にかけての複合遺跡である可能性が高くなってきた。2006年度の調査で新規発見された吉江中遺跡は、今回さらに北西へ約100m拡張することとなった。ここからは須恵器3片、越中瀬戸2片、磁器5片を採集した。2006年度の調査で範囲が拡張した仏道寺跡は、さらに北西へ約75m拡張することとなった。ここからは須恵器2片、土師器2片、越前1片、越中瀬戸3片、唐津1片、近世の陶器2片と磁器1片を採集した。

次に、遺物の散布状況から遺跡の動態に関して考えてみたい。古代の遺物は、ほぼ須恵器に限られるが、小矢部川西岸の松木遺跡や和泉西領遺跡、そしてさらに明神川を越えて医王山裾部の川西細田遺跡や川西北辻遺跡、法林寺村中遺跡に及んでいることは注目される。古代に関しては、2006年度の調査範囲、つまり小矢部川の東側では、吉江中、仏道寺、一日市の3遺跡を中心に多数の須恵器が採集されている。しかし、今回の主たる調査範囲である小矢部川の西側では、古代の遺跡はこれまで未確認であった。古代の遺跡が小矢部川を越えて医王山裾部にまで分布するということがわかったことは、南砺地域における土地利用の変遷を知る上で重要な成果と言える。

中世の遺物は、須恵器の散布状況とほぼ重なり、やはり医王山裾部へ至る広範な分布がみられる。ただし、いずれの遺跡においても数片の採集に留まるものであり、継続的または拠点的な遺跡を彷彿とさせる様相はみてとれなかった。これに対して、2006年度の調査範囲では、小矢部川とその東側に流れる大井川とに挟まれた地区にある吉江中、仏道寺、荒木、荒木Ⅱ、田中、一日市などの遺跡から多数の中世遺物が採集された。さらに、大井川の東岸では梅原胡摩堂遺跡を中心とする遺跡群がこの時期に形成され、地域的拠点へ発展をとげ

たことをあわせて考えると、小矢部川を挟んでその西側と東側とでは、居住や開発などの様相が大きく異なっていたのかもしれない。近世の遺物に關しても、医王山裾部までの広がりがみられるものの、散漫な分布傾向を示している。仏道寺、常楽寺、一日市の3遺跡を中心に多数の近世遺物が採集された2006年度調査範囲の様相と対比すると、小矢部川の西側と東側の遺跡の間には、やはり対照的な方がある。

なお、富山県西部の押型文期の代表的遺跡である人母シモヤマ遺跡をはじめ、旧石器から縄文時代の遺跡が複数確認、調査されている医王山麓部の南蟹谷地区では、期待されたにもかかわらず遺物は採集されなかった。弥生から古墳時代の遺物もまた、今回の調査範囲では採集されなかった。

以上、分布調査の成果を概述し、古代以降の土地利用に関して推測を行ってきたが、中世以後の城館および社寺とされている複数の遺跡を除いては、大半が遺物散布地としての取り扱いであり、よりもなおさず遺跡の規模や時期、性格などについては不明確な点が多い。また、未確認の遺跡もなお存在することと思われる。今後は、さらなる遺跡の把握を行うとともに、これら遺跡の保護に務めていきたい。

(高橋彰則・田上和彦・高橋浩二)

## 参考文献

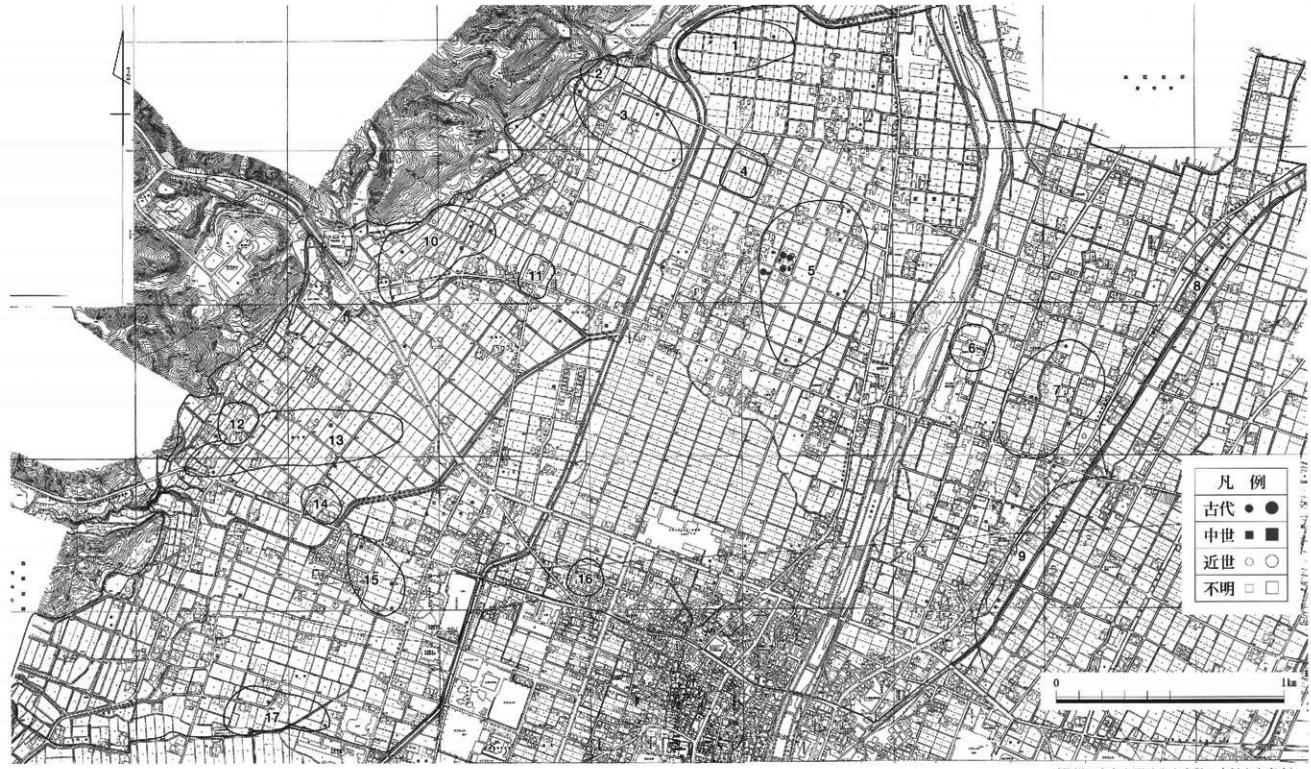
- 相賀徹夫1977『世界陶磁全集』3日本中世、小学館  
井上喜久男1992『尾張陶磁』、ニュー・サイエンス社  
上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会  
大橋康二1993『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』、ニュー・サイエンス社  
珠洲市立珠洲焼博物館1989『珠洲の名陶』  
財團法人埋蔵文化財センター1993『東海の中世窯—生産技術の交流と展開—』  
中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
財團法人文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－』  
富山大学人文学部考古学研究室1989『越中上末窯』  
富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会1993『珠洲大畠窯』  
中村浩1981『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』株柏書房  
南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室2007『富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告2—福光地域1—』  
南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室2008『富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告3—福光地域2—』  
日本中世土器研究会1985『中近世土器の基礎研究』  
平安学園考古学クラブ1996『陶邑古窯址群』I  
岡壁忠彦1991『考古学ライブラリー 60 備前焼』ニュー・サイエンス社  
宮田進一1997『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房  
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第2表 調査結果一覧（新規、内容変更の遺跡のみ記載）

吉江・石黒地区

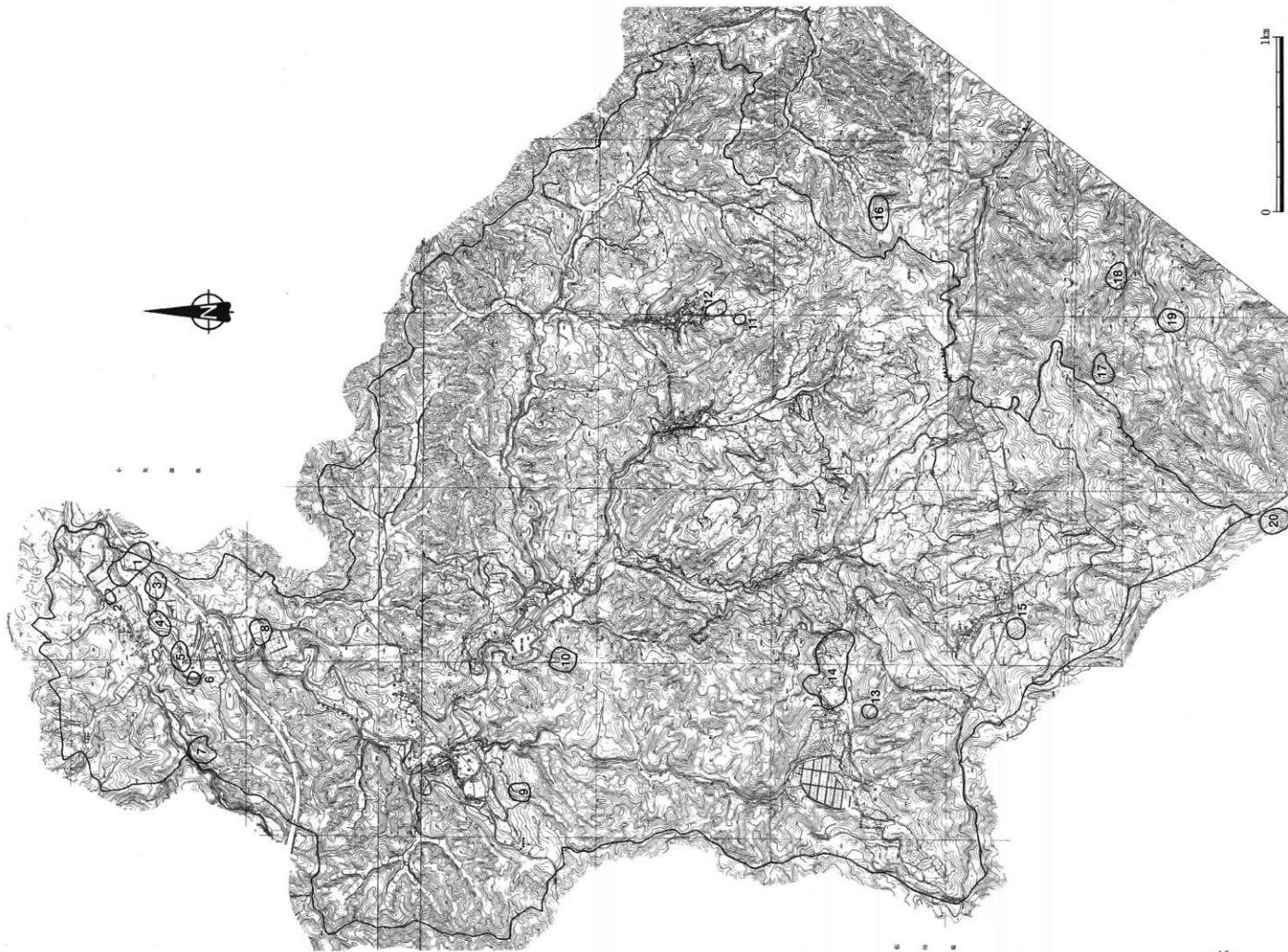
遺跡名	ふりがな	所在地	主な時代	種別	確認別	備考
常楽寺跡	じょうらくじあと	遊部	中世	中世社寺	周知	北東側範囲拡大
吉江中遺跡	よしえなかいせき	遊部	古代 中世	散布地	周知	西側範囲拡大
仏道寺跡	ぶつどうじあと	田中	縄文 古代 中世	縄文散布地 古代散布地 中世散布地 中世社寺	周知	南西側範囲拡大
川西細田遺跡	かわにしほそだいせき	川西	古代 近世	散布地	新規	
川西北辻遺跡	かわにしきたつじいせき	川西	古代	散布地	新規	
和泉西領遺跡	いずみにしりょういせき	和泉	古代	散布地	新規	
松木遺跡	まつのきいせき	松木	古代 中世 近世	散布地	新規	
法林寺村中遺跡	ほうりんじむらなかいせき	法林寺	古代 中世	散布地	新規	
法林寺高原遺跡	ほうりんじたかやいせき	法林寺	古代 中世	散布地	新規	
坂本遺跡	さかもといせき	坂本	古代 中世	散布地	新規	

※南蟹谷地区は変更無し



第5図 調査結果概要図1 (S=1/12,500)

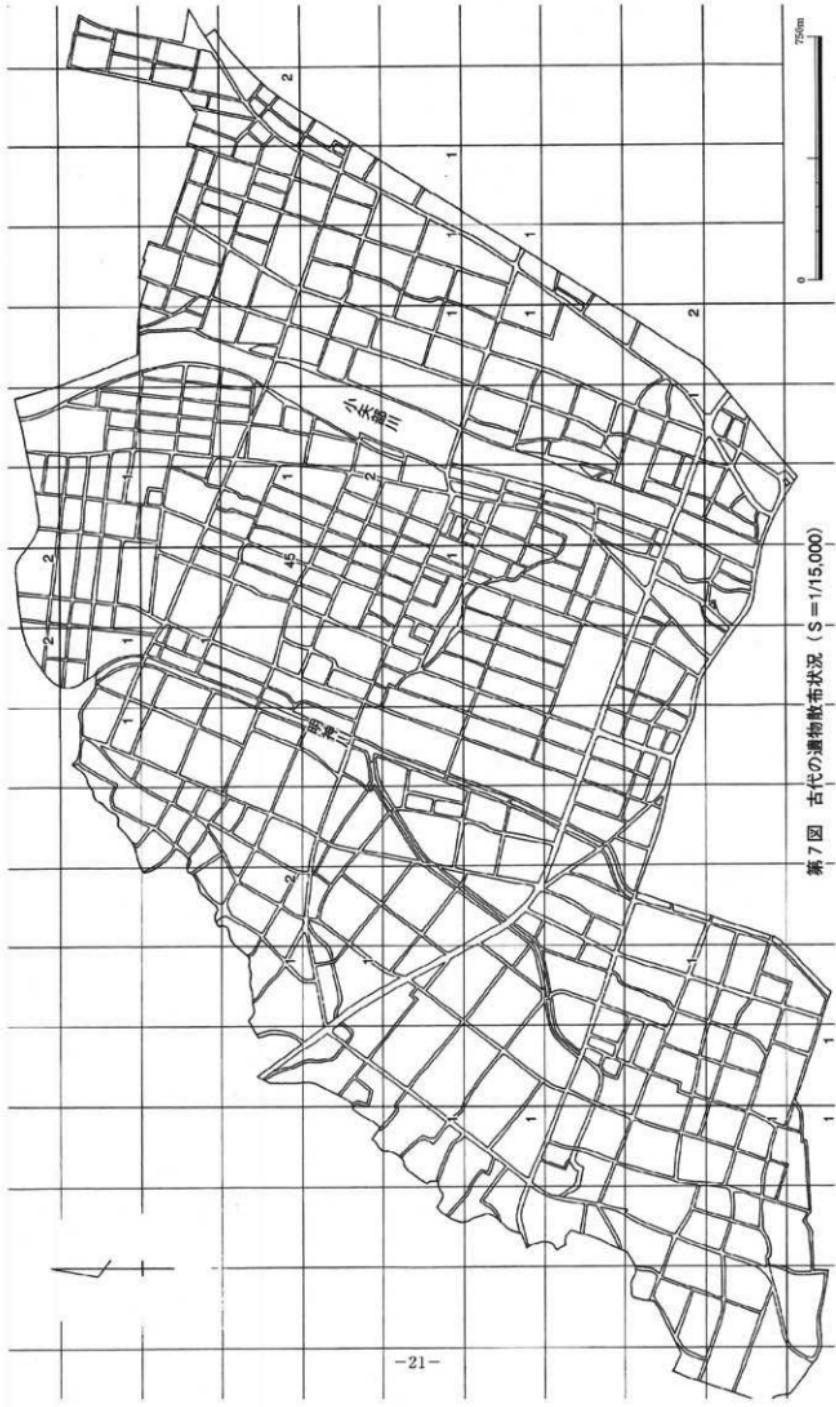
- 1. 和泉西領遺跡
- 2. 最勝寺跡
- 3. 川西北辻遺跡
- 4. 長勝寺跡
- 5. 松木遺跡
- 6. 遊部城跡
- 7. 常楽寺跡
- 8. 吉江中遺跡
- 9. 仏道寺跡
- 10. 川西細田遺跡
- 11. 川合田館跡
- 12. 光徳寺遺跡
- 13. 法林寺村中遺跡
- 14. 妙法寺跡
- 15. 法林寺高屋遺跡
- 16. 順船遺跡
- 17. 坂本遺跡



第6図 調査結果概要図2 (S=1/20,000)

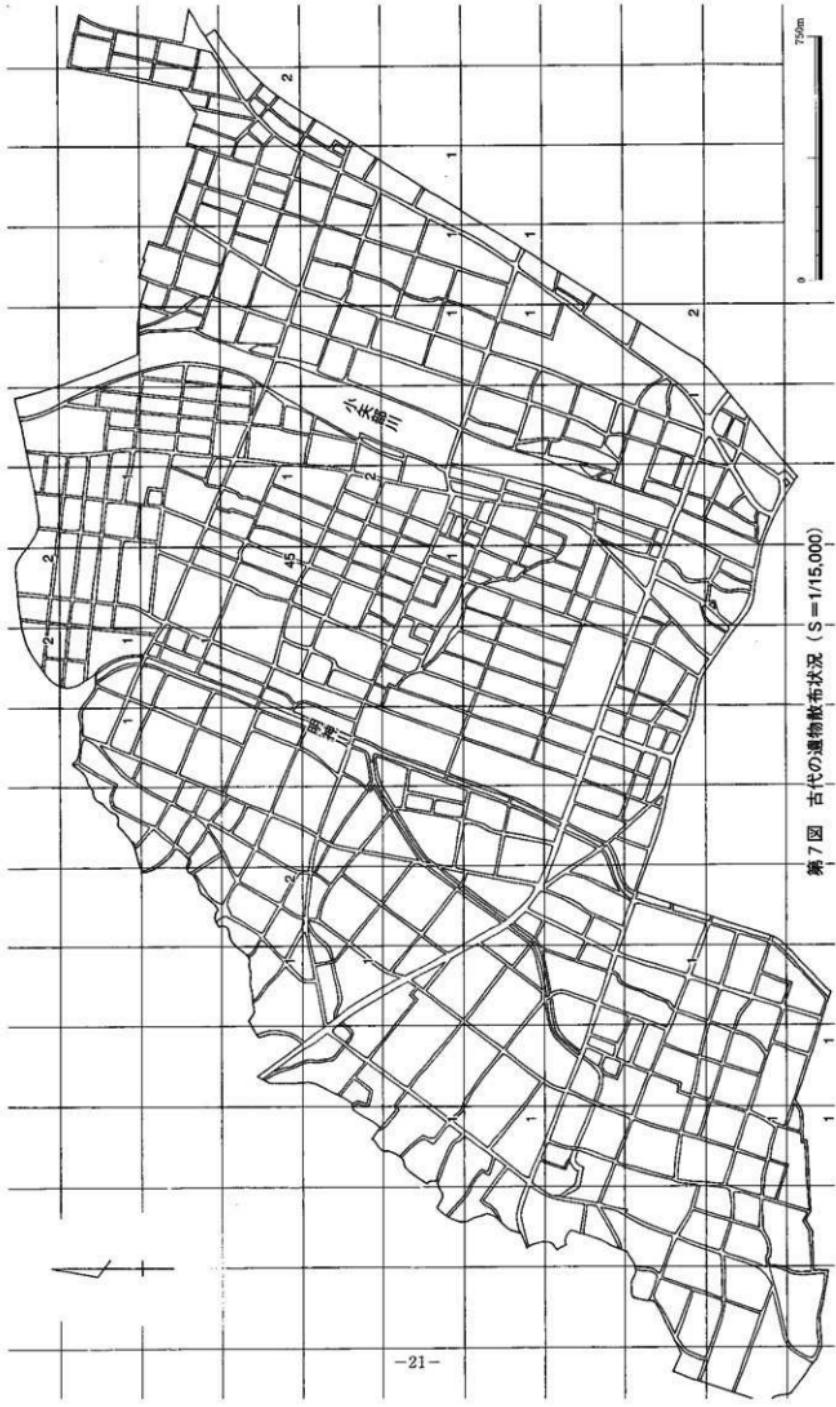
1. 人母モヤマ道路 2. 人母モヤマ西道路 3. 人母1道路 4. 人母モヤマ東道路  
 5. 人母Ⅲ道路 6. 人母谷合道路 7. 人母茂谷西道路  
 8. 人母ウルシバラ道路 9. 高木坂道路 10. 高木坂道路 11. 萩原A道路 12. 萩原B道路  
 13. 桶野社道路 14. 土山動力・鉛峰東跡  
 15. 別原 16. 岩保道路 17. 大木坂道路 18. 立井当路 19. 法林寺道路 20. 空取山炭坑

第7図 古代の遺物散布状況 ( $S = 1/15,000$ )



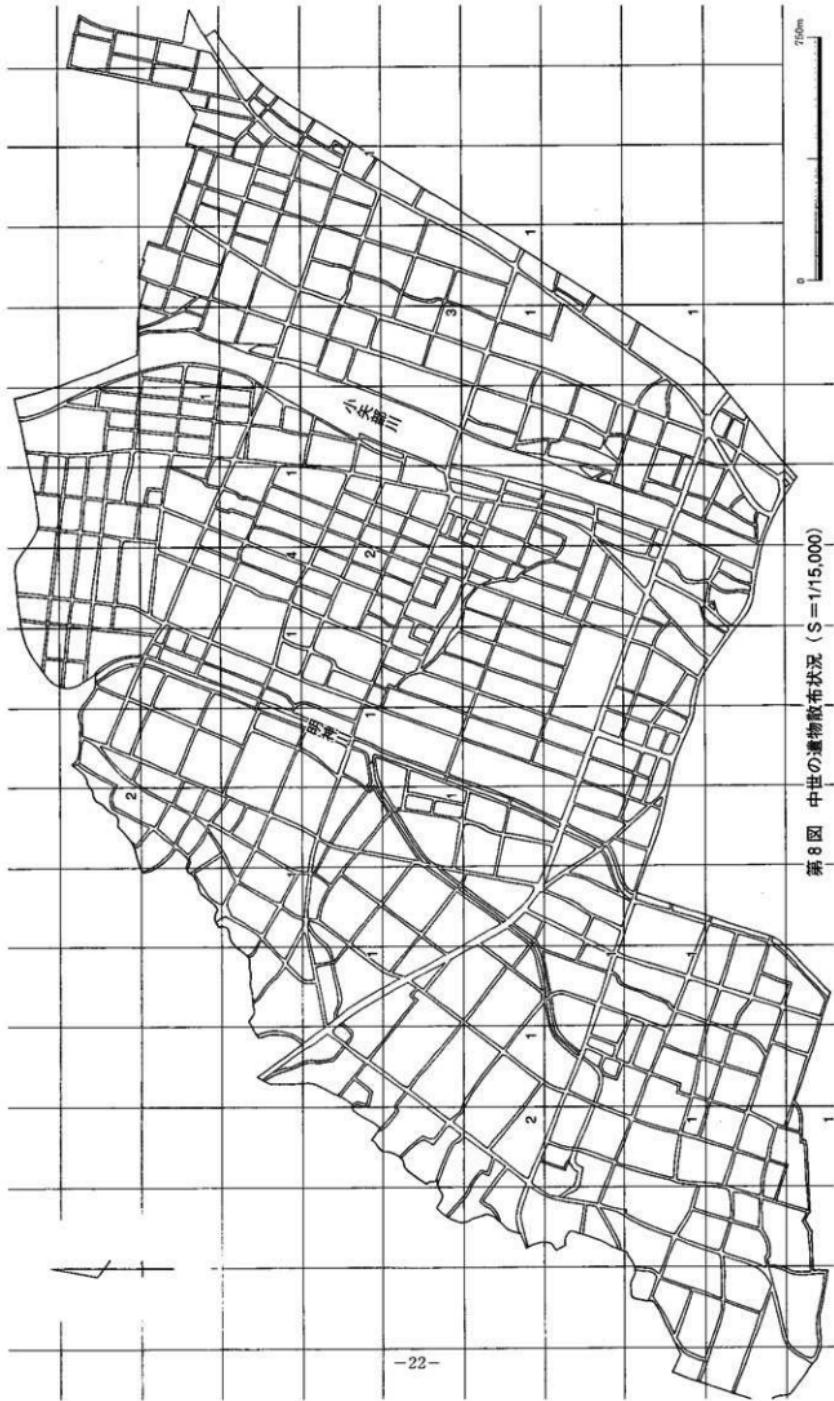
第7図 古代の遺物散布状況 (S=1/15,000)

75m



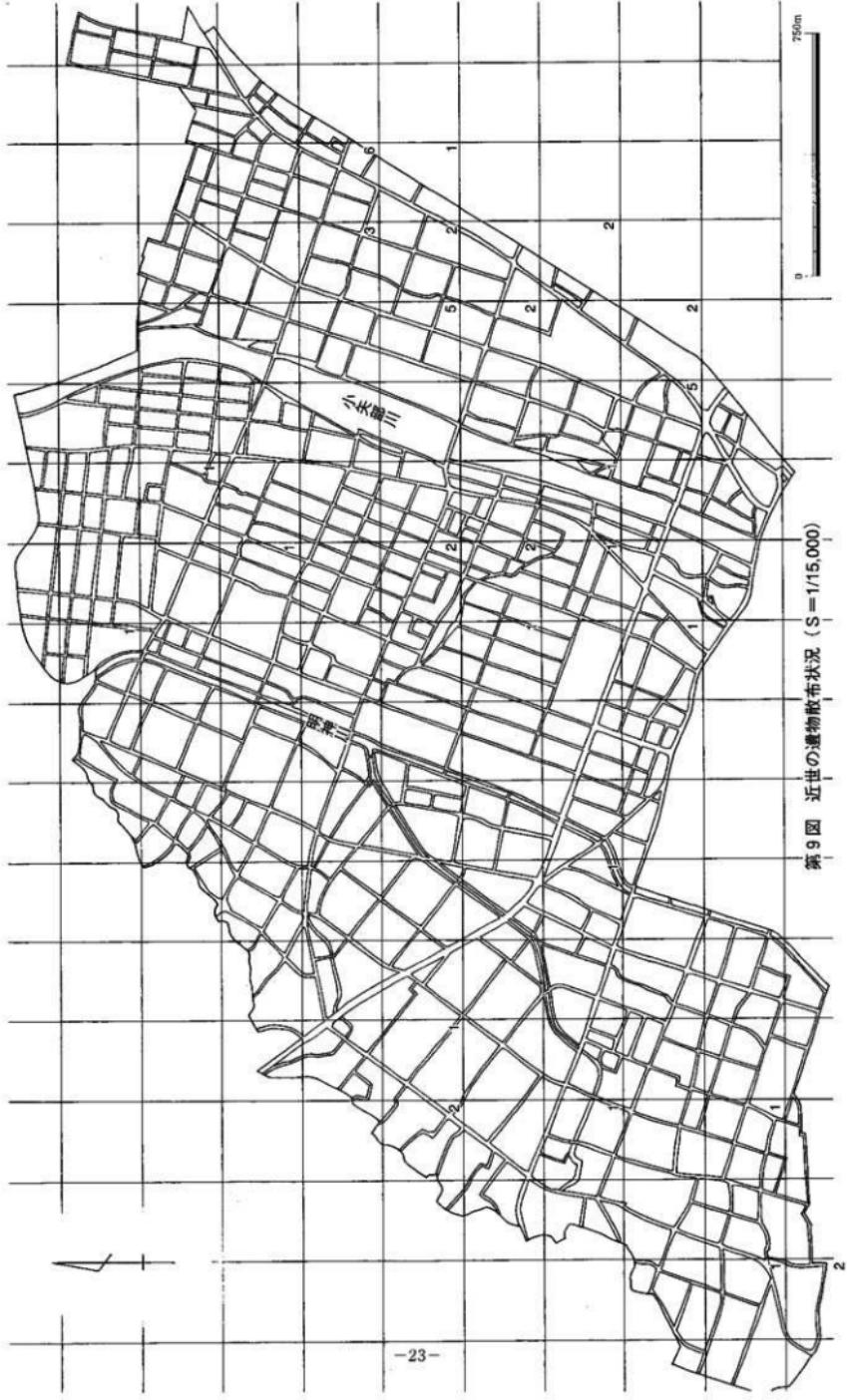
750m

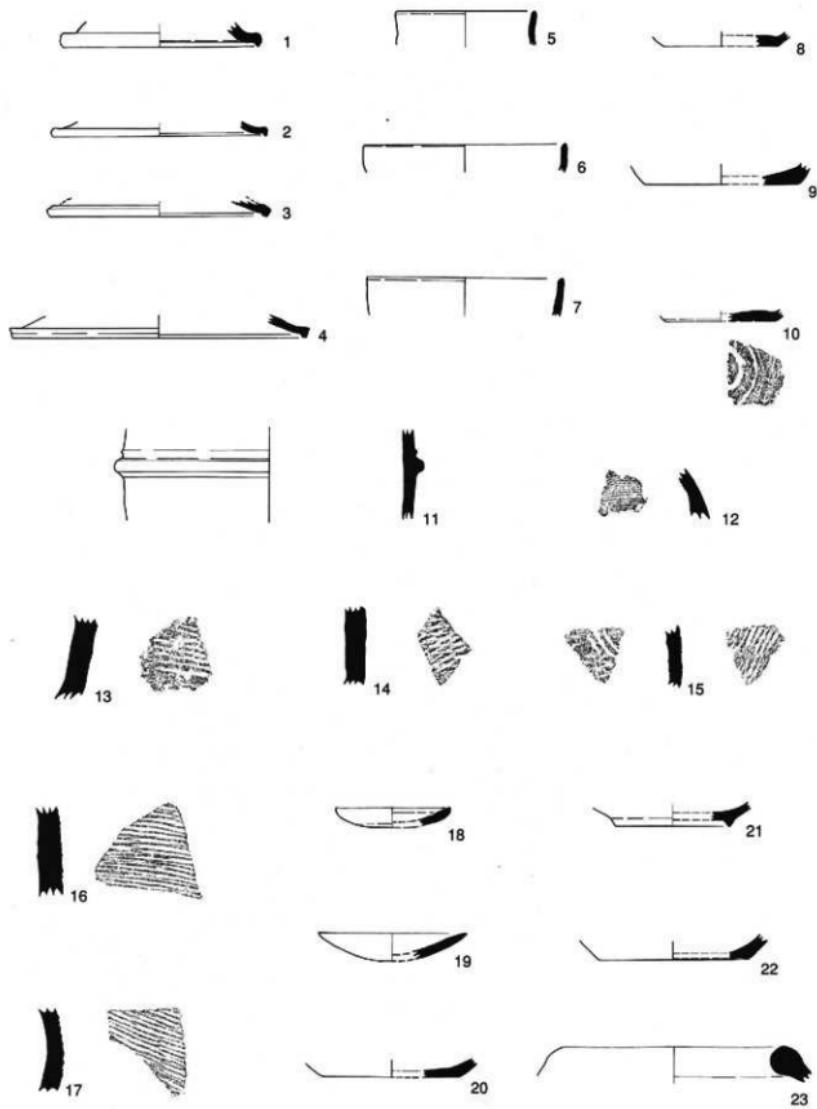
第8図 中世の遺物散布状況 (S=1/15,000)



750m

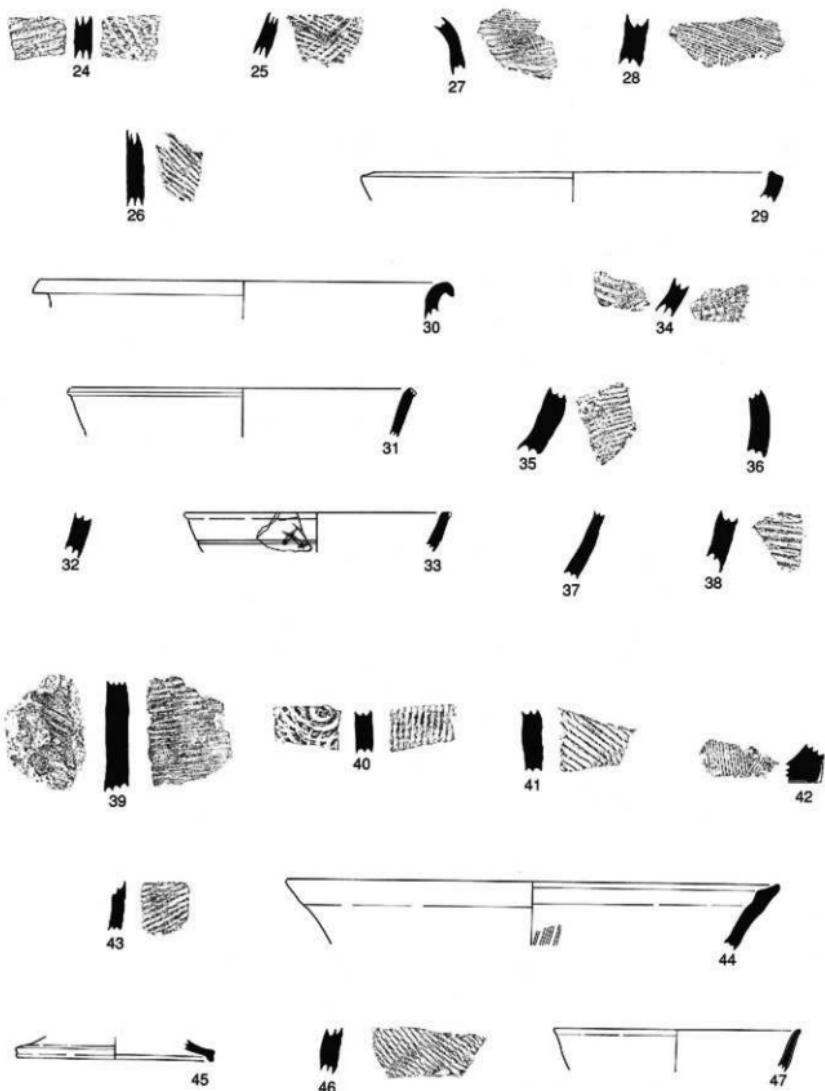
第9図 近世の遺物散布状況 (S=1/15,000)





第10図 遺物実測図(1)  
1~23 松木遺跡 (S=1/3)

0 10cm

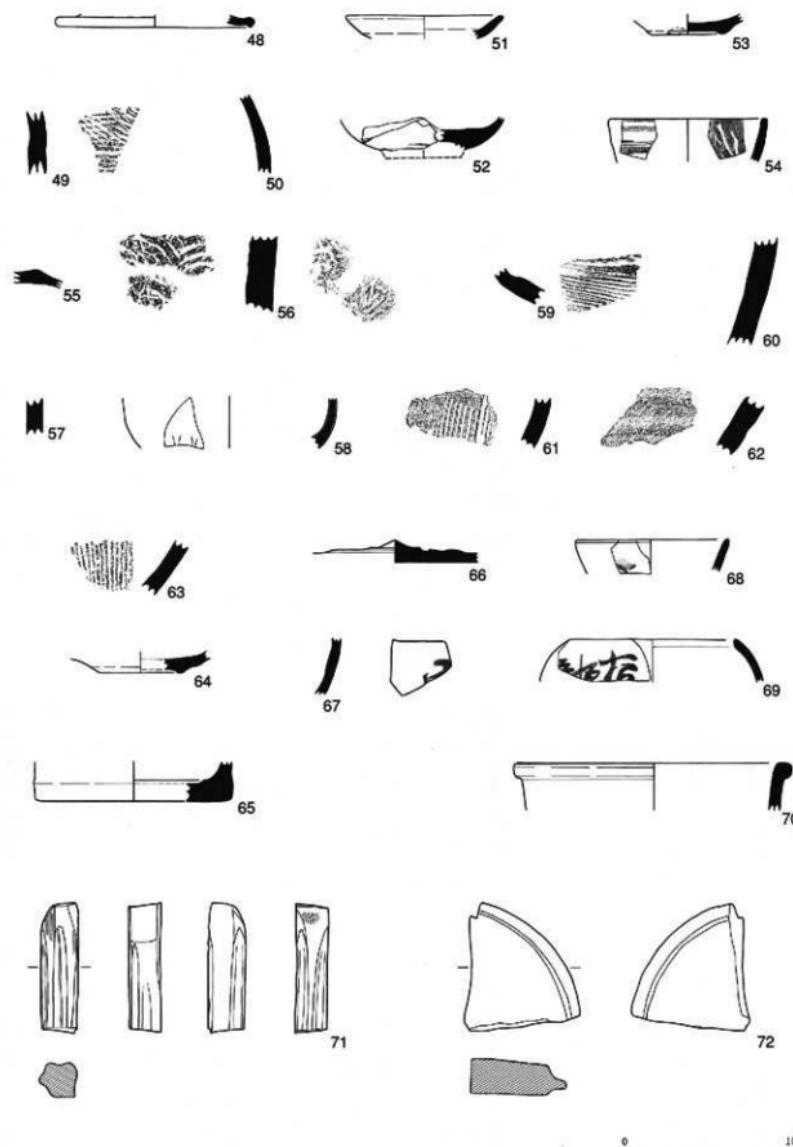


第11図 遺物実測図(2)

24~26 和泉西領遺跡 27~29 川西北辻遺跡 30~33 常楽寺遺跡

34~38 川西細田遺跡 39~42 法林寺村中遺跡 43、44 坂本遺跡 45~47 法林寺高屋遺跡 (S=1/3)

0 10cm



第12図 遺物実測図(3)  
48~52 吉江中遺跡 53、54 仏道寺遺跡 55~72 遺跡範囲外出土品 (S=1/3)



1



2



3



4



5



6



7



8

図版1 遺跡全景(1)

1. 長勝寺跡 2. 川合田館跡 3. 光徳寺遺跡 4. 妙法寺跡  
5. 遊部城跡 6. 常楽寺跡 7. 西勝寺遺跡・高櫻城跡 8. 最勝寺跡



1



2



3



4



5



6



7



8

図版2 遺跡全景(2)

1. 和東西領遺跡 2. 松木遺跡  
5. 坂本遺跡 6. 川西細田遺跡  
7. 仏道寺跡（範囲拡大） 8. 吉江中遺跡（範囲拡大）



図版3 遺跡全景(3)

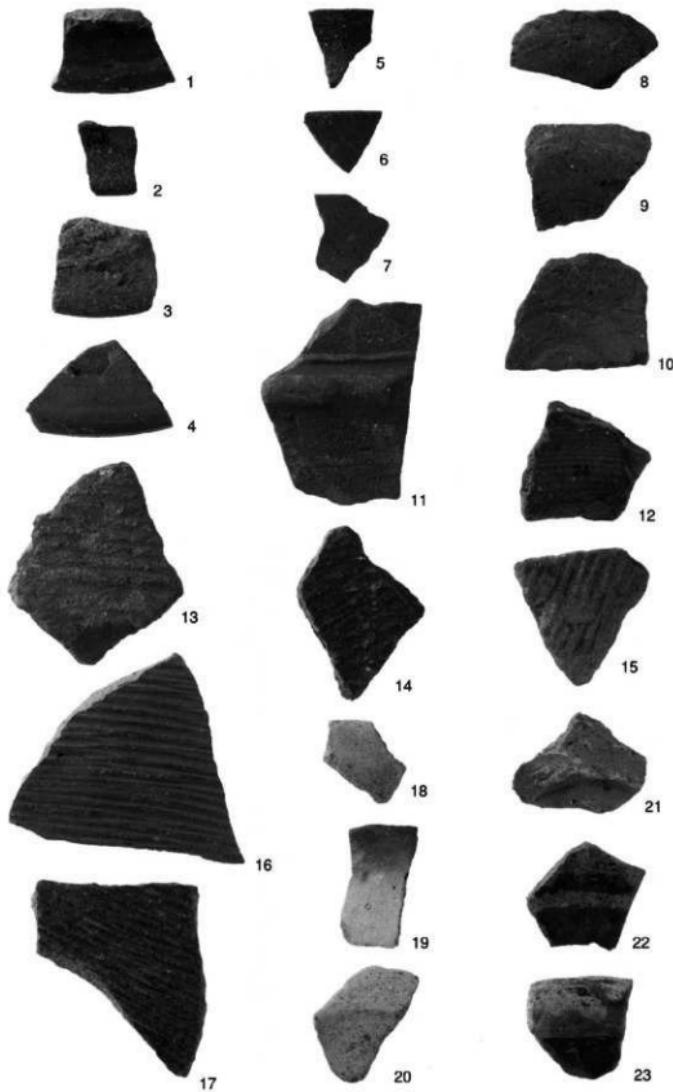
1. 法林寺村中遺跡 2. 常楽寺跡（範囲拡大） 3. 人母シモヤマ遺跡 4. 人母I遺跡  
5. 人母II遺跡 6. 人母茂谷遺跡 7. 人母ウルシバラ遺跡 8. 高木場御坊跡



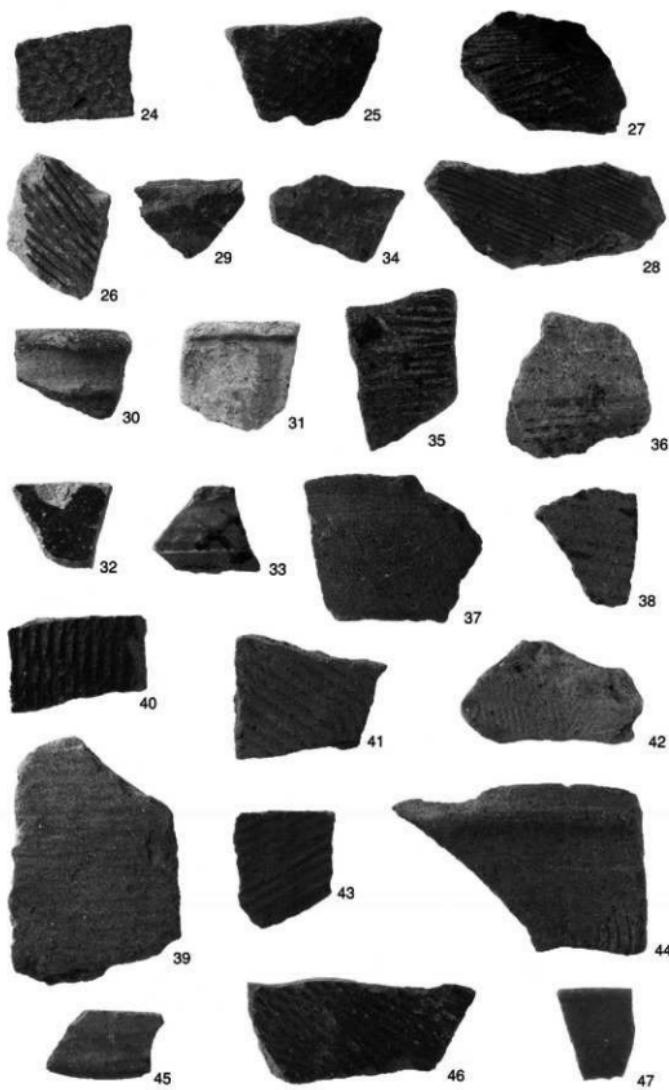
図版4 遺跡全景(4)

1. 高窪遺跡 2. 蔽原A遺跡 3. 蔽原B遺跡  
5. 土山御坊跡・庭園 6. 土山御坊跡・南側土壘

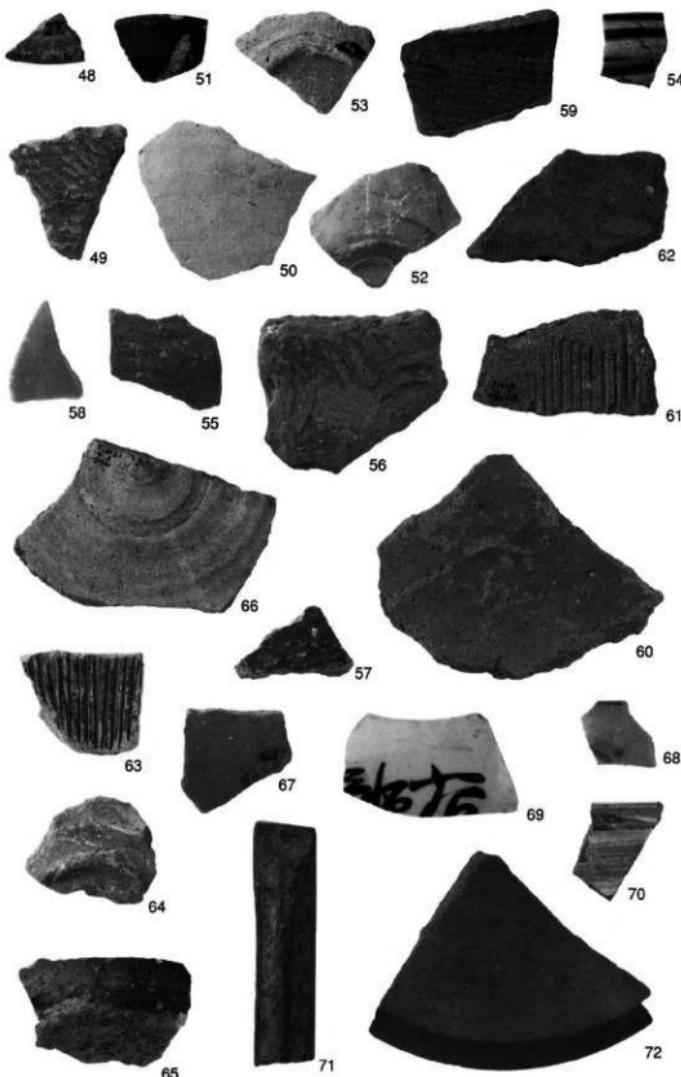
4. 熊野社遺跡 7. 踏査状況 8. 調査参加者



図版5 遺物写真(1)



図版 6 遺物写真(2)



図版7 遺物写真(3)

# 報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとしまいぞうぶんかさいぶんぶちょうさほうくよんふくみつちいきさん							
書名	富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告4－福光地域3－							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書24							
編著者名	高橋浩二 高橋彩則 田上和彦 繁野千恵美 生方香織 及川実沙子 河合陽介 北村史織 繁柳文佳 小浦方志織 東海林心 百瀬香菜子 佐藤聖子 黒崎直							
編集・発行機関	南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL (0763)23-2014				南砺市教育委員会			
	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL (076)445-6195				富山大学人文学部考古学研究室			
発行年月日	西暦2009年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
市内遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	—	36° 34' 00"	136° 52' 40"	20080408 ~20080413 20081004	—	—
所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物		特記事項		
市内遺跡	—	古代 中世	—	須恵器、土師器 中世土師器、珠洲、 青磁、越中瀬戸、 瓦質土器、唐津、常滑、 その他近世陶磁器		—		
		近世						

## 南砺市埋蔵文化財分布調査報告4

－福光地域3－

平成21年3月31日

福光  
発行 南砺市教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

印刷牧印刷株式会社

